

# 大盜懺悔

野村胡堂

一

人間業わざでは盗めそうもない物を盗んで、遅くとも三日以内には、元の持主に返すという不思議な盗賊が、江戸中を疾風しつぷうの如く荒し廻りました。

「平次、御奉行朝倉石見守様あさくらいわみのかみから厳きつい御達しだ、——近頃府内を

騒がす盗賊、盗んだ品を返せば罪はないようなものではあるが、あまりと言えばお上の御威光ないがを蔑ないがしろにする仕打だ。明日とも言

わず、からめ取って来い——と仰しやる、何とか良い工夫はあるまいか」

南町奉行付、与力筆頭笹野新三郎、自分とは身分が違いながら、親身のように思っている捕物の名人銭形の平次に、こう打ち明けて頼み込みました。

「へエ、——私も考えないじゃ御座いません。盗んで直ぐ返すというやり方が第一気に入りません。恋の附文、貧の盗みと言う位で、食うに困つての盗みなら、悪いながらも可哀想とも思います。

盗んだ品を翌る日返すのは、盗みを道楽にしている人でなきやア、私共をからかつ翻弄ひんろうしているに相違御座いません、何とかしてあの野郎をフ

ン捕まえなきゃア、錢形の平次も世間へ顔向けがなりません」

平次は、日頃の温厚な様子にも似ず、ツイ拳固げんこで膝を叩きながら、縁側の敷居際までにじり寄ります。

「お前がその気なら、遠からず捉つかまえられるだろう——少しは心当りがあるだろうな」

「恥ずかしながら、何の手掛りも御座いません」

「女泥棒だというが、本当だろうな」

「それも当にはなりません。盗んだ品を返しに来るのは、目の醒めるような美しい新造しんぞだって言いますが、それが盗むにしちや、手際が良過ぎます」

「と言うと」

「鍵や錠じょうを苦もなく外すのは兎も角として、一丈も一丈二尺もある塀を飛越したり、長押ながしを踏んで座敷へ忍び込んだり、とても女や子供に出来る芸当じゃ御座いません」

「フーム」

笹野新三郎も、銭形の平次も、近頃人も無げに出没する怪盗——風の如く去来するから世間では風太郎と言っておりますが——には全く手を焼いてしまいました。

「たった一つ、仕残した手段てだてが御座います」

「どんな事だ」

「謀事は密なるを要すつて申しませう。もう二三日お待ち下さはかりごといまし」

「ハツハツハツ、平次は思いの外学者だな」

「へエ——」

苦味走った好い男の平次も、笹野新三郎に逢つては頭が上がりません。

二

「親分」

「何だガラツ八か、騒々しい」

「ガラツ八は情けねえな、——御注進、御注進とお出でなすつたんで」

「気取るな、一体何がどうしたんだ」

平次は落着き払って、子分のガラツ八の顔を見上げました。

「昨夜風太郎が入りましたよ」

「何処へ」

「浅草の隆興寺」  
りゅうこうじ

「何を盗った」

「本堂の奥のお厨子ずしの中から三寸二分の黄金仏、大日如来だいにちによらい」

「罰当り奴め」

「親分、あつしが盗つたんじゃありませんぜ」

「手前てめえに盗れる訳もねえやな、案内しろ」

「親分が行つて下さりや、ガラツ八も、心丈夫だ。こう来なせえ」

「馬鹿にするな」

藍あいまじん微塵すあわせの素裕、十手を懐に隠して、突かけ草履、少し三枚目染

みる子分のガラツ八を案内に、銭形の平次は浅草の隆興寺へ飛んで行きました。

三寸二分、金無垢きんむくの大日如来というのは、本堂の奥に安置した

教祖の木像の胎内仏たいないぼとけで、別にお厨子を作つて見えるところに安置

したのは、少しでも寺内を賑やかにしようと言う住職の商売気、そこを見込んで怪盜風太郎が、昨夜一と晩のうちに盗み出して仕舞ったのです。

風太郎に逢っては、鍵も錠も問題ではありません。

住職に逢って、愚痴ぐちやら繰り言やらを聞いた平次は、あとは調べるでも探すでもありません。ケロリとして、庭に出ると、寺男を捉まえて小半日植木の講釈などをした挙句あげく、今度は本堂の中に入って、寺相応の彫刻やら額やら絵やらを眺めて、お厨子の方などは振り向いて見ようともしません。

「親分、真氣ほんきになつて捜してやつておくんなさいまし。あの黄金

仏がなくなりやア、本山は申すに及ばず、檀家中だんかへ申訳がないから、傘一本で寺を明け渡さなきやアなるまいと、住職は萎しおれ返つておりますぜ——親分」

「わかったよ、それより、どんな者がこの寺へ出入りするか、一々見張っていない」

「へエ——？」

「風太郎の仕業なら返すに極っている。どんな人間が持つて来るか、俺はそれが知りてえ」

「なア—る、親分は親分だけの勘考かんこうだ、返しに来た野郎が取りも直さず盗んだ野郎って事になりますね」

「まアね」

「ようし、こうなりや蟻ありの行列だって、見のがすこつちやねえ」  
ガラツ八は二つの眼玉を剥いて見張りましたが、さて不審と思  
うような人間は一人も出入りしません。

無事に一日を過して、念のためにその辺中を探して見ると、本  
堂の賽銭箱の側に、紙に包んだお捻ひねりが一つありました。何の気  
もなく開けて見ると、その中から現れたのは、金色燦爛たる三寸  
二分の胎内仏たいないぼとけ——大日如来だいにちによらいです。

「あッ」

「何時の間に持って来やあがったんだ」

さすが銭形の平次も驚き呆れるばかり、朝から多勢来た参詣の男女のうち、どれが怪盗風太郎なのか、全く以て見当も付きません。

### 三

翌晩襲おそわれたのは、本郷春木町の質屋で上総屋重兵衛、どうし

て八重の締りを解いたか、表口の嚴重な潜くぐりを開けて、店格子を

乗り越え、小僧達の頭の上を跨またいで、奥の一間に通じ、主重兵衛

の枕元に置いた用ようだんす筆筒の中から、これも錠前を綺麗に開けて、小

判で三百両、切餅を十二ほど持出されてしまったのです。

当時三百両と言え一と身代と言つても宜いほどの大金、上総屋重兵衛蒼くなつて訴え出ました。

「風太郎の仕業なら二三日のうちに返つて来るだろう。その間俺を邪魔でも帳場へ置いちゃくれまいか」

「へエ——、それはもう願つてもないことで、第一盜賊の入つた後で、店の者も暫らくは怖こわがつてなりません」

重兵衛はおおのりき大乘氣で引受けてしまいました。ガラツ八には用心の

ために外の路地を見張らせて、合図があつたら飛出すことにし、錢形の平次は、その儘上総屋の帳場に坐つて、来る客来る客に鋭

い眼を配りました。

客は平常へいぜいの通りやって来ますが、さて風太郎らしいのは一人もありません。夕刻の立て込む真つ最中、至つて粗末な様子をしておりますが、如何にも若くて美しそうな女が、店格子の前へすり込んで、

「お帳面を忘れて来ました。濟みませんがこれをここへ置かして下さい、ちよいと取つて来ますから」

一人言ごとのように言つて、ヒョイと暖簾のれんを潜ります。

「あ、そこへ置いて行つては困ります」と言つたが及びません。

番頭の注意を背に聞いて、外へ飛出してしまった若い女は、それっ切り戻っては来なかつたのです。

「おや、可怪おかしいぜ。あの包みを持って来て見せな、風太郎と言うのは矢張り女かな」

銭形の平次もまことに迂遠うえん千万、この時漸く気が付いて、女が置いて行つた包みを開いて見ると、中からは小判が三百両、切餅の封も切らず、盗られた時のまんま、そっくり入っていたのです。

「あッ」

驚きに驚きを重ねるばかり、怪盜風太郎一味には若くて美しい女がいるという事を確めた以外には平次ほどの者も何んにも擱

んでおりません。

#### 四

それから三日目有名な茶人しげのゆうはく繁野友白のところへ忍び込んで、さ  
る大名から預った名物ものの茶碗を盗んだものがあります。名物  
ものと言つても、それは祖先の誰たれそれこう某公が朝鮮役の功勞で豊太閤か  
ら貰つたという由緒ゆいしよづき付のもの。伊達政宗がひどく羨うらやんで、岩代  
半国と代えようと申込んだが、到頭譲らなかつたと言う、天下  
稀きこう覲の大名物です。

これを盗まれては、繁野友白首でも縊くらなければ追っ付きませ  
 ん。唯一の頼みは、盗んだのが近頃府内を騒がす怪盜風太郎なら  
 ば、三日とたたない内にきつと返してくるだろうと言う一事だ  
 け、友白は萎しおれ返りながらも、それを心頼みに、二日まで空しく  
 待つて見ました。

今日は三日目となると、いても起つてもいられません。風太郎  
 も名物の茶碗を惜しんだものか、三日の昼過になつても返して来  
 ず、友白はいよいよ土壇場どたんぼに坐つた心持で、日頃の落着きも失つ  
 て、奥と門口との間にお百度を踏んでおります。

錢形の平次も三日詰め切りしましたが、さて何の役にも立ちませ

ん。風太郎の手口は百も承知ですから、風の如く通って歩いた後を嗅いだところで何の匂いも残ってはいず、この上は、例の通り品物を返しに来るのを待ち伏せて、有無うむを言わさず縛り上げる外はなかつたのです。

風太郎が、ここの門を入りさえすれば、どんなに姿を変えていても、平次の捕縄を免れのがようはありません。が三日目の昼過ぎまで待ち呆けを喰わして、何の音沙汰もないのはどうした事でしょう。いよいよ茶碗を返してくれなければ——と思うと繁野友白最早生きた空もなかつたのです。

未刻やつさが下り、やがて申刻ななつにも近かろうと思う頃、お勝手口へフラ

リ人の影がさします。

「それッ」

と行つて見ると、見知り越しの隣の男の子、風太郎如何に神出しんしゅつ鬼没きぼつの怪盜でも、こんなになれッこはありません。

「叔母様、これ粗末なものですが、皆さんで召上がつて下さい  
て——」

言いつかつた口上通りを取次いで、友白の妻の前に出したの  
は井どんぶりへ入れた饅頭。

「それは御丁寧に有難う御座いました」

取り込んでいたので、気を利かしてお茶受けを持って来てくれ

たのだろう——そんな事を考えながらヒョイと見ると、饅頭を入れた井と見たのは、三日前に盗まれた名物の茶碗。

「あッ、これはどうだ」

そこへ来合せた友白は饅頭を投ほうり出して、茶碗を掻かい抱かくように、右から左から、ためつすかしつ、鶉うの毛で突ついた程の瑕きずも見落さずと調べています。

「坊っちゃん、ちよいと待った」

平次は飛付いて、危うく隣の子を押えました。

「好い子だ、あの饅頭はどこから持って来たか、教えておくれ」  
「おいらのせいじゃないや、放しておくれよう」

物々しさに怯おびえて泣き出しそう。

そこへ友白の妻やら、隣りの主人やらが来て、宥なだめすかしながら聞くと、路地の外で若く美しい女の人に頼まれたとだけは判りましたが、子供のことで、年頃も人相もはつきりした事は言えませんが。

人間業とは思えぬこうみょうせいち巧妙精緻な風太郎の手口を見ると、決して二人や三人の仕事ではなく、異常な頭脳あたまと体力を持ったたった一人の仕業に相違ないということがよくわかります。して見ると、盗んだ品物を返しに来る、あの若くて美しい女というのが、怪盜風太郎本人でなければなりません。

一体、何のために盗んで、何のために返すのでしょうか。返って来た小判や茶碗を見ると、疑いもなく元のままの真物ほんもので、贋物と摺り替えた形跡は少しもなく、あんなに骨を折って盗った癖に、鏢びたせん銭一枚身に着けないのですから、この泥捧の目的ばかりは全く見当も付かないのでした。

怪盜風太郎と言うのは、若くて美しい女だそうだ——という噂は、その日のうちに江戸中にひろ拡がってしまいました。

## 五

「平次、又風太郎だ」

「へエー、今度はどこへ入りました」

与力笹野新三郎に喚よび付けられた平次、面目次第もなく差し俯向きました。怪盜風太郎が江戸を荒し始めてからザツト三月、江戸中の岡っ引が、腕よりに撚よりを掛けて競きそいましたが、何としても捉まえることが出来ません。特に捕物の名人とか何とか言われている、銭形の平次、与力筆頭笹野新三郎から特別の言葉があっただけに、穴があつたら入りたいほど恥じ入っております。

「今度は少し困った事になった」

「と仰しやると」

「小日向こびなたに屋敷を持っておられる赤井左門殿、二千八百石を食はんで、旗本中でも屈指の家柄だ。知っているであろうな」

「殿様は四十がらみの立派な方、尚上様の御覚えが目出度いという評判で御座いますな——よく存じております」

「それなら話し宜い。実は——その赤井左門殿のところへ風太郎が入った」

「へエ——」

「盗ったのは物もあろうに、上様うえさまお声掛りで勘定奉行から引渡された千両箱が二つ」

「エーッ」

これには平次も驚きました。千両箱が二つと言うと、金の相場  
で今日の四百万円位、物価の比例で割り出すと四五百万円にも当  
る大金です。

それに、この千両箱は並大抵の品ではありません。尚上様家光  
公が、京都の空与上人をことの外御信心で、上人のため洛北に一  
宇の堂を建立う こんりゆうするため、二千両の寄進に付きましたが、表沙汰に  
なると、何かと手続きが面倒、そつと勘定奉行に内意を含め、日  
頃目を掛けてあんしろういる安祥旗本中あんしろうでも家柄の赤井左門を使者に立て  
て、別に家光公直々の祈願文を認め、二千両の大金と一緒に上方  
へ送ることになっていたのです。

赤井左門の出発は来月の一日、あと七八日の間、御墨附と二千両の大金を、奥の一と間に飾って、寝ずの番を附けるようにして守護したのですが、どこに隙があつたものか、一と晩のうちに、千両箱二つ煙の如く消えてしまつたのです。

御墨附が無事だつたのは、不幸中の幸いですが、手元不如意ふによいの赤井左門が、八所借やところがりをしたところで、二千両という大金の工面が

付きません。出発の日までにこの金の工面が付かなければ、赤井

左門腹を切つても申訳しなければならぬ仕儀、工夫に余つて、日

頃じっこん昵懇じっこんにしている笹野新三郎に相談をして見ました。町方与力は

係りが違いますが、若年寄に訴え出たところで、どうにもなるも

のではなく下手へたに表沙汰にすると、腹切道具ですから、筋違いな  
がら町方の新三郎に持ち込んで来たのです。

「こう言うわけだ。平次、一と骨折って見てはくれまいか」

笹野新三郎、改めて若い平次の顔を頼母たのもし気に見詰めるのでし  
た。

「それはお気の毒なことで御座いますが、風太郎の仕業と決まれ  
ば、三日経たないうちに戻って参りましょう」

「それがいけない」

「と仰しゃいますと?」

「盗られてから今日が五日目だ。さすが風太郎も、二千両という

大金に眼がくれたと見えるな」

「そんな事は御座いません」

「お前は太閤風太郎の肩を持つが、返って来る見込でもあると言  
うのか」

「兎に角、赤井様のお屋敷の中を拝見さして頂きたいのですが、  
お言葉添えを頂けますで御座いますでしょうか」

「それは何でもない事だ。後刻平次と言う御用聞を遣つかわしまし  
ようと、はつきり断つてある」

「それでは一と走り」

「あ、これこれ平次、赤井殿の出発の日取りはあと三日の後に

迫っている。それまでに千両箱が二つ揃って返らないと、お気の毒ながら赤井殿は腹を召さなければならぬ。解つたろうな」

「仰しやる迄も御座いませぬ。今度は平次も死物狂いで、キット風太郎を引つ捉まえて参りましょう」

錢形の平次は八丁堀から小日向へ、初夏の街を<sup>まち</sup>大汗になつて駆け付けました。

## 六

旗本赤井左門は、この時四十二の<sup>やくどし</sup>厄年、家柄も人品も不足のな

い人物ですが、少し癩癬かんべきの強いのが瑕きずで、若い時分には、それでいろいろ問題を起しましたが、四十を越すとさすがにそれも納つて、近頃は尚上様家光公の側近くに仕えて重宝がられております。「平次とか言ったな、飛んだ手数を掛けるが、何分宜しく頼むぞ」「へエ——」

二千八百石の殿様から、泥棒の手口を聴くわけにも行きません。平次は一度左門の前を滑って、用人の足尾喜内から、何彼とその日の様子を聴き取りました。

盗まれたのは小判で二千両、これは型の通り四方金具ほうかなぐの嚴重な箱に入れられて、御墨附と一緒に奥座敷の床の間に飾り、隣の間

には足尾喜内や家中の若侍、若党などが交代で寝ずの番をしておりました。

箱一つの重さは中身の黄金こがねだけで四貫目、箱を加えると五貫目になりますから、二つ抱えると十貫目、余程の力がないと持ち出せません。

門も木戸も内から鎖とぎされたままになっていたと言いますから、邸内に手引の者が無い限り曲者は塀を越えて逃げたものと思わなければなりません。邸内に住んでいるのは、赤井左門の家の子郎党達ばかり、草履取ぞうりとりや中間まで、千葉の領地から呼んだ正直者ばかりですから、そんな大それた人間はいる筈ありません。

そうすると曲者は、五貫目の千両箱を二つ抱えて、一丈あまりの高塀を越して逃げたことになりましたが、これは一寸人間業では出来そうもない離れ業です。まして、世間の評判通り、風太郎が若くて美しい女だとしたら、一体どんな事になるでしょう。

平次は腕を拱こまぬいて考えました。

「ガラツ八、手前てめえその塀へ這い昇って見な」

「へエ——」

「身体も気も軽いのが自慢のお前じゃないか、それ位の事は出来るだろう」

「出来ねえことはありませんが、泥棒の真似は気がさすな」

「何をつまらねえ、気取ったって褒めちややらないよ」

ガラツ八到頭あきらめて、塀へ飛び付きました。高いと言つても板塀ですから、内側からなら這い登れないことはありません。



©2017 萩 柚月

「よしよし、塀の越しっぷりが宜いと思つて、悪い料簡を起すな」

「親分、冗談を言つちやいけねえ」

「待て待て、今度はこの石を二つ持つて越すんだ、抱えても背せ負おつても構わねえ」

「こいつア無理だよ、親分」

「まア、やつて見な、無事に越せたら石は手前にやる。家へ持つて歸つて、沢庵たくわんの重しにでもするが宜い」

「からかつちやいけねえ」

平次がこんな冗談を言つてる時は、一番真剣な事を百も承知のガラッ八は、素直に二つの石を背負つて塀を越そうとしましたが、

十貫目の荷物を背負つては、どう工夫してもこの塀を越せません。ガラッ八が危うく引くり返りそうになるのを抱き止めて、

「よしよしもう沢山だ、飛んだ骨を折らせた。サアこっちへ入るがいい」

引揚げると縁側から見ている赤井左門の前へ小腰を屈かがめました。

「殿様、千両箱はお屋敷から持出されちゃいません」

「何？」

左門は今更眼を見張ります。

「三日経って返して来ないのも可怪しいが、——風太郎だって鬼き

神じんではないでしょうから、あの塀を越すにはどうしても一度千両箱を下へ置くか、塀の上へ載せるか、向う側へ投ほうり出すかしなければなりません。風太郎が越したろうと思う辺には、そんな跡は一つもありません。下はあの通り土やわらの柔かい畑はたけで、重い箱を置けば形位はつきます」

「フーム」

「風太郎は恐ろしい早業ですが、女だろうと言われている位で、決して大力では御座いません。二つの千両箱はお屋敷の外へ持出されていないと申すのは、こうしたわけで御座います」

「成程、そうもあろうな、餅は餅屋だ——とところでその箱はどこ

に隠してあるだろう。屋敷の中は大抵探した積りだが――」

赤井左門もすっかり乗気になりました。

「あの泉水せんすいの中を御覧なさいましたか」

「ウム、それは気が付かなかった」

それツと言うと、待て暫しはありません。中間若党が水門を引っこ抜いて、水もろくに引かない内から飛込んで掻き廻すと、すっかり泥を冠かぶっておりますが、間違いもなく二つの千両箱は、その中に沈められているのでした。

この喜びは長くは続きませんでした。千両箱を洗い清めて封印を直して、明日はいよいよ出発という晩、赤井左門の邸はもう一度怪盗に襲われたのです。

今度盗られたのは、空与上人くうよしょうにんに与える筈の、將軍家光公の御墨おすみ附つき、これは千両箱と違って掛け替がありませんから、赤井左門も全く弱ってしまいました。

「二度まで赤井家を襲うというのは容易でない。これは怨みうらだな、平次」

「私もそう気の付いたところで御座いました」

「何しろ、御墨附は容易でない。御苦労だがもう一度行つて見てくれ」

「へエ——」

そう言われなくてさえ、張り切つた若駒のように飛出そうとしている平次、いよいよ怪盜風太郎と、人交えもせず最後の腕比べをしてやろうと思うと、思わず武者顫いが全身を走ります。

笹野新三郎に別れて、八丁堀の往来へ出ると、ポンと弾き上げたのは、例の銭占ぜにうらないの青銭、落ちて来るのを平掌ひらてに受けて開くと、

それが形かたち。

「——吉と来やあがる、しめ、しめ」

両袖を合せてポンと叩くと、そのまま弥造やぞうを拵えて、小日向へ早足になります。

赤井の屋敷に着いて、足尾喜内に案内さして、邸内隈くまなく探しましたが、今度は千両箱と違って、泉水に沈める筈もなし、全く見当が付きません。

主あるじの左門に逢って、

「人に怨を受ける覚えは——？」

と聴くと、若い時は名題かんべきの癩癖で、随分横車を押し切っているから、どこから怨を受けているか、見当も付かないと言う有様、今度は赤井左門も萎しおれ返って、口をきくのもおつくうそうです。

「八、外へ出る」

「へエ、喧嘩が始まるんですか」

「馬鹿ッ、そんな暢気のんきな話じゃねえ。いつぞやお茶の宗匠の饅頭でしくじった事を知ってるだろう。外を見張れ、家の中には用事がねえ」

「成アる——親分は矢張り親分だけの考えがあるね」

「馬鹿にするな」

二人は表と裏に分れて、二つの入口を見張りました。平次は荒物屋の店先を借りて裏門を見張り、ガラッ八は草っ原に寝転んで表門を見張ることにしたのです。

なんどき

しぶちや

それから何刻かたちました。平次は荒物屋の女房の好意で日蔭にも渋茶しぶちやにも有り付きましたが、気のきかない野良犬のように、小日向の草原に潜り込んだガラツ八は、真上から初夏の陽に照りつけられて、気が遠くなるほど干されてしまいました。

陽が漸くかげり始めた頃、近所の悪戯ツ子らしいのがチヨコチヨコと赤井左門の裏門へかかりました。

ヒヨイと見ると、手には何やら紙片を持っている様子。

「あッ」

平次は荒物屋の店を飛出すと、その子供には眼もくれず、街の左右に素早く眼を配りました。

右手、茗荷谷へ抜ける方に、一人の女が悪戯ツ子の姿をじつと見送っております。

「あれだッ」

と思うと一足飛びに――

それを見た女は、ハツとした様子で曲り角から吸われるように姿を消してしまいました。

「おのれ、逃してなるものか」

その間僅かに三十歩、平次が道の角へ飛付いた時は、逃げ行く女の姿はなくて反対に、近所の者らしい娘が一人、向うから来てハツと平次に鉢合せはちあわせしそうになりました。

「アッ」

二人は危うく飛退きました。

「ちよいと伺いますが、今こつちから逃げて行つた若い女を見ませんか」

「いいえ」

女はニツコリしたようでした。狭い道を、平次とすれすれに通つて、向うへ行こうとするのを、

「待つた」

平次は後ろから帯際を取つて押えました。

「あれッ」

「騒ぐな、お前は風太郎と言われる曲者に相違あるまい」

「エッ」

「逃げる振りをして、逆に取り返した手際は、尋常の者には出  
来ない事だ、それに、お前の声に覚えがある」

春木町の上総屋の帳場で、平次はこの女の声を一度聞いている  
のでした。

「いいえ違います」

「神妙にしろ」

銀磨ぎんみがきの朱房の十手は、平次の手にキラリと光りました。

「ガラッ八来い、捕ったぞ」

「おツ、そいつは有難てえ。この上夜露に打たれると、人間の力キ餅が出来そうだ」

ガラツ八は表の草叢くさむらの中から飛び出して、忠実な犬っころのよ  
うに駆けて来ました。

「いよう、こいつは大した代物だ、風太郎てえのはこの新造ですかい」

「そうだろうと思う」

「泥棒さしておくのは勿体ねえ」

「馬鹿野郎、何を言う」

しかし、平次もガラツ八の言葉を承認しょうにんしないわけには行きませ

んでした。後ろ手に縛られて、夕陽の中に立った娘の美しさは、眼も覚めるばかり。解き下げて無造作に束ねた髪、地模様の綸子りんずの帯、町家風の木綿物の小綺麗な袷も身に合って、何とはなしに清らかさと美しさが溢あふれるのでした。

## 八

お墨附すみつきは返った――、曲者は捉まった。赤井左門の屋敷は夕陽に咲いた花のように陽気になりました。

しかし、それもほんの暫く、女が子供に托たくして返した御墨附を

受取った赤井左門、手を清めて改めると、御墨附に似せてはあるが、真つ赤な偽物にせものの紙片だったので。

「おお平次を呼べ」

縄付の娘を中間部屋に伴れ込んで、いろいろ責め問うている平次は、即刻赤井左門の前に呼出されました。

「平次、御墨付は贋物だぞ」

「エッ」

「出発は明日に迫っている。この上手間取つて、万一表沙汰になつては、過怠かたいの罪は免れ難い。腹を切るのも易い事だが、上様御墨附を汚した上、赤井の家名を断絶さしては、何としても忍び

難い。頼むぞ平次」

二千八百石取の殿様が、岡っ引風情に手を合せないばかり。

「――」

平次は黙然として考えました。

「明朝までに御墨附が返らなければ、生きてお前に逢うのもこれ限りだ、――その娘とやらを拷問こうもんにかけても、御墨附の在所ありかを訊してくれ」

少し乱暴なようですが、事件を表沙汰にして、町奉行所へ持つて行かれないとすると、これも一つの考えようでしょう。

「宜しゅう御座います殿様、御庭先を拝借して、あの娘を拷問に

かけましよう。どうぞお立ち合い下さいまし」

平次は退つて娘を庭先に引出しました。赤井左門から命令が

たかはりぢょうちん

あらむしろ

あつたものか、庭先には高張提灯をかかげ、番手桶を積み荒筵を

しらす

敷き、俄か事ながらすべてお白洲その儘に作つて、往来に向いた

庭木戸を真一文字に開かせました。

おもてぎた

表沙汰になるのを極端に嫌いながら、これは又何とした事で

しよう。もつとも町内へは屋敷へ女賊が入つて、大事の品を盗ん

で隠したので、その在所を白状させるためという触れ込み。退屈

し切っていた、山の手特有の有閑階級人は、『そいつは面白い』と

なだ

庭木戸から一パイに雪崩れ込みました。二千八百石取の旗本のす

ること、その上有名な御用聞の銭形の平次が付いているのですから、こんな不法の折檻せつかんをとがめ立てる人もありません。

娘は庭の真ん中に敷いた荒筵の上に引据えられて荒筵を突き破って打ち込んだ青竹に、半身裸のまま荒縄で縛り上げられました。

沓脱くつぬぎには赤井左門、沓脱の下には銭形の平次、ガラツ八と中間が責手で、この残酷ざんこくな見物が幕を切って落されたのです。

「娘、その方は近頃世上を騒がす風太郎という盜賊に相違あるまい。この屋敷から盗んだ品をどこへ匿かくした。いずれは町方与力の手に引渡して、仕置を願うその方が、その前に、この屋敷から盜

み取った品だけは取り上げなければならぬ。サア、真つ直ぐに白状せえ」

用人の足尾喜内、少し屈った腰を延して、娘を縛った青竹の後ろを、竹刀しなで力任せに引叩きます。

娘は猿轡さるぐつわをはめられて、悲鳴も絶叫も漏らせないようにしてあります。が一つ竹刀で打たれる毎に、半裸体の上半身の白い肉がピクピクと顫ふるえて、荒繩に食い込まれた肩から胸をねじ曲げます。

「手ぬるいぞ喜内、もっと打て」

と赤井左門。

「私が代ってやりましょう。さア、娘」

平次は竹刀しなを取って立ち上りました。この岡っ引にしては珍しく人間味のある男、『失策平次』しくじりとまで縛名あだなされる男が、縛った娘の若々しい肉を、自分から進んで打ち据えようとはなんとした事でしょう。

高張提灯の薄暗い灯の下に、五六十人も押し重った町内の人達も、あまりの苛酷かこくな情景シーンに眼そむを反けて、非難の囁やきを波打たせます。

「さア、言え、言う気があつたら、首を三つ縦に振れ、そうしたら、猿轡ざるぐつわを外してやる、大事の品を何処どこに隠した」

平次の竹刀は続け様に娘の背に鳴りましたが、娘は身もだえし

て苦しみながら、どうしても在所ありかを言おうとはしません。

「この上は殿様、この娘を五分試し一寸試しに斬つてやつて下さい。そうでもしなければ口を開くような女じゃ御座いません」

「よし」

赤井左門は庭下駄を突っかけて降り立ちました。右手には新身あらみの一刀、灯あかりを受けて焼金の如く凄まじく光ります。

## 九

「待った」

見物の中から飛出した男。

ガラッ八と中間を突き飛ばして、娘の前に大手を拡げて立ちはだかりました。

「何物？」

赤井左門の叱咤しつたを的まと面に受けて、

「世間で言う怪盜風太郎とは俺の事だ」

臆おくれた色もなく言つて退けて、赤井左門と錢形ぜにがたの平次を屹と見

据えました。年の頃四五六、小作りで少し華奢きゃしゃな身体ですが、

妙に抜目のない身のこなし、商人風とも遊び人風とも付かぬ身装みなり

のうちにも、何かしら一脈の怪奇さがあります。

「曲者ッ、御用ッ」

飛付こうとするガラツ八を尻目に、

「騒ぐなガラクタ、名乗って出た位えだ、逃げも隠れもしねえ」  
落着き払って懐へ手を入れます。

「風太郎とはお前だったのか、さん珊五郎ろう、言い分があるなら聞いてやろう」

「お、さすがは平次、よく言った。下手にあがくと俺の懐の中で御墨附はズタズタになるぞ」

兇賊と御用聞は、ピタリと見合つたまま、お互の呼吸を測はかつて  
おります。赤井左門も足尾喜内も、ガラツ八も、もう二人の眼中

にはありません。珊五郎と言うのは、お蔵前で少しは名を売った遊び人、これが怪盜風太郎の正体とは、さすがに平次も予想外だったのでしょう。

「なア平次、お前なら話がわかるだろう、聞いてくれ、こう言うわけだ——」

「——」

娘を後ろに庇かばいながら、珊五郎の風太郎は声を落しました。

「何の因果いんがか、俺には物を盗まずにいらねえ病気があるんだ。

身体も軽く、知恵も人並にあるのが身の仇で、人間業で盗めそうもないものを見るとどうしても盗まずにいらねえ。これが持つ

て生れた俺の弱気だ。——女房が生きている内はまだよかったが、三年前に女房に死別れてから、どうしても盗み癖くせが直されねえ、知つての通り俺は暮しに困るわけじゃなし、金が欲しくて盗みをするわけじゃねえ、——今まで盗んだ金や品を、たった一つも身につけないのはそのためだ。娘は俺のこの癖くせを心配して、いろいろ意見をしたがどうしても直されねえ、お仕舞にはあきらめて、俺の盗んだものを、自分で元の持主に返して歩いた始末だ。——風太郎というのは女泥棒だなどという噂を聞いて、俺はどんなに気を揉んだことか、平次察してくれ」

あまりの不思議な物語に、平次も左門も口がきけません。珊五さん

郎ろうはそれに構わず、悲痛に顔をふり仰いで続けました。

「ところが、たった一つ返されねえ品物があつた。それはこの屋敷から盗つた千両箱と御墨附だ。わけを話せば長いが、一口に言つてしまえば、ここにいる赤井左門は、若い時酒の上で、少しばかりの粗相を楯たてに、隅田堤すみだづつみの花見の最中、俺を無礼討にしかけた事がある。幸い危いところで命だけは助かったが、その時受けたのがこの疵きずだ」

顔をヌツと出すと、横疵の珊五郎と綽名あだなにまで言われた刃の跡が、四十男の額口から頬へかけて、斜に赤い線を引いております。「俺が赤井左門に腹を切らせようと目論んだわけが解つたろう。

——千両箱は重いから泉水へ沈めたが、それを見付けられたので、御墨附を盗んだ迄の事だ。娘が又後生氣を出して、元の持主に返そうとするのは解り切っているから、わざと偽物にせものの御墨附を拵えて娘につかましたのだ。——それが仇あだになって、娘はお前達にこんな目に逢わされる事になったのは珊五郎一生の失策しっさくよ、解ったか平次。——それにしても、縮尻平次と言われる人気者のお前が、若い娘をこんなムゴイ目に逢わせるのはどうしたわけだ。今までお前を買い被しゃくった俺が癩しやくにさわる、この——怨はきつと返してやるぞ、平次」

「珊五郎、よくその娘を見る。鵜の毛で突いた程の傷でもあった

ら、この平次は大地に手を突いて詫をする」

「何？」

「皆んなお前をおびき寄せる細工さいくだ。娘が捉つたと聞いたらお前はどうぞここへ来ずにはいられまい」

「畜生ッ」

「さア、それで話は済んだ、御墨附を置いて、娘を伴れて帰れ。

赤井の殿様は、あの通り若い時の過あやまちを詫びていらっしやる」

そう言われて振り向くと、なる程赤井左門は恥じ入る様子で珊瑚郎の方へ黙礼しておりました。

「本当なら縄を打って引立てる所だが、平次の眼の届かねえとこ

ろへ行くなら許してやる。解ったか珊五郎」

「ウム」

珊五郎は暫らく黙り込んで、青竹に縛られた娘の恙無つつがない顔と、左門と平次の敵意のない顔を見比べました。

銭形平次は、こうして又縮尻しくじりを一つ重ねました。風太郎と言われた怪盜珊五郎は、その場から行方知れず、赤井左門は翌る日都への旅路に上りました。

「平次、又盜賊を逃したそうだな、お前の道楽にも困ったものだ」  
そう言う笹野新三郎の小言は、何とと言う甘いなつかしいもの

だったでしょう。

「へエ——」

平次はその前にひれ伏して、一言もありません。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

底本——「錢形平次捕物全集」第一卷  
河出書房  
昭和三十一年五月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>